

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 15 日現在

機関番号：32689

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2016

課題番号：26370117

研究課題名(和文) 日本バレエの誕生『東京バレエ団』とその歴史的意義

研究課題名(英文) The Birth of Japanese Ballet "Tokyo Ballet Troupe" and its Historical Significance

研究代表者

川島 京子 (KAWASHIMA, Kyoko)

早稲田大学・文学大学院・その他(招聘研究員)

研究者番号：10409732

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,700,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、日本バレエ史上最大のメルクマールと位置付けられる「東京バレエ団」(1946年結成、1950年自然消滅)の実像を明らかにするとともに、その歴史的意義を考察することを目的としている。具体的には、(1)これまで明らかにならなかった東京バレエ団の活動実態および上演作品を、現存資料、聞き取り調査から、その実像を浮かび上がらせること、(2)東京バレエ団の活動とその後「世界有数のバレエ大国」と称されることとなる日本バレエ界の発展との因果関係の考察、(3)東京バレエ団の結成、解散の原因ともいえる日本バレエ界の特殊性を、今日的視点から捉えなおすことである。

研究成果の概要(英文)：This research is to reveal the real image of Tokyo Ballet Troup (established in 1946, natural annihilation) characterized as one of the most critical benchmark of Japan ballet history. Specifically, it is to grasp (1) the realities of the Tokyo Ballet Troup's activities and the performance works that had not been revealed so far, from the existing materials and interview surveys, (2) the causal relation between the activities of the Tokyo Ballet Troup and the development of the Japanese ballet world which was later called the world's leading ballet power country, (3) the specialty of the Japan ballet world caused the formation and dissolution of the Tokyo Ballet Troup, reconsidered from the present perspective.

研究分野：芸術学、舞踊学、バレエ史

キーワード：東京バレエ団 白鳥の湖 島田廣

1. 研究開始当初の背景

日本のバレエは、明治・大正期の西洋芸術移入の段階で、舞踊が除外されたことにより、海外のような国立バレエ学校での専門家教育は行われず、民間によって発展してきた。その結果、バレエは西洋芸術でありながら、極めて日本的な、近代以前の芸道システム(稽古事文化)に組み込まれて発展した。しかし、日本で初めてバレエと名の付く作品が紹介された帝国劇場開場(1911年)以来、わずか100年の歴史に満たない日本バレエは、現在、名実ともに世界有数のバレエ大国として認められている。申請者は、この理由をこの「稽古事文化」としてのバレエが、逆に、日本独自のバレエにおける底辺拡大型教育を実現し、結果、他国に例をみない大きな成果を手にしたと考える。さらに、この底辺拡大型教育を支えたのが、戦後日本の社会現象となったバレエ・ブーム及び、そのバレエ・ブームを巻き起こした「東京バレエ団」であると捉える。

本来バレエは長い時間をかけ養成された専門家による大規模の総合舞台芸術であり、舞台制作、舞踊家育成すべてにおいて、国家の組織立った支援の下、総結集して行われものである。それに対し、民間で発展した日本バレエにおいては、日本にバレエを移植したといえる白系ロシア人バレリーナ、エリアナ・パヴロバ以来、細分化した各団体が、家元制度に根ざした徒弟制度のシステムの下で互いに競い合って生徒を集め、促成栽培で舞踊家を育成し公演を行わざるを得なかった。戦後の日本バレエ界は、こうした問題を克服するべく模索し、幾度となく日本バレエ界として一体化する試みを行ってきた。

戦後間もない1946年、エリアナ・パヴロバから独立して各自の団体を形成していた東勇作バレエ団、服部・島田バレエ団、貝谷八百子バレエ団、さらに上海バレエ・リュスから引き揚げたばかりの小牧正英が加わり、彼らは「東京バレエ団」(現在のチャイコフスキー記念東京バレエ団とは別組織)という名称で結集し、日本人の手によって『白鳥の湖』全幕日本初演を実現する。この公演は、エリアナの手を離れ、日本人の弟子たちによってバレエが再始動された日本バレエの第二の出発点と捉えられる。東京バレエ団は、第7回公演まで続いたものの第1回公演から次第に内部分裂し、最終的には事実上小牧バレエ団中心の公演となり、やがて自然消滅となる。

しかし、1946年帝国劇場で行われた東京バレエ団による『白鳥の湖』全幕日本初演を起点として、バレエは敗戦後の暗い世相に夢と希望を与える象徴となり、また高度経済成長期とも重なったことで、1950年代を中心に、日本では爆発的なバレエ・ブームが巻き起こる。バレエは、バレエ界の枠を超え、映画、文学、テレビ、少女雑誌、漫画といった

様々なメディアに取り上げられ社会現象となった。これにより、バレエは日本文化の重要な一部をなし、バレエを習う子供たちは激増し、先に述べた底辺拡大型教育を実現する支えとなったと考えられる。それは、その後の日本バレエ界を中心に支えてきた重要人物たちの多くがこの時期にバレエを始めていることでも裏付けられる。

2. 研究の目的

本研究は、日本バレエ史上最大のメルクマールと位置付けられる「東京バレエ団」(1946年結成、1950年自然消滅)の実像を明らかにするとともに、その歴史的意義を考察することを目的としている。また、これまでの研究で明らかになった「稽古事文化」としての日本バレエの特殊性と、現在認められている「世界有数のバレエ大国日本」との因果関係の中に、「東京バレエ団」を位置づけることを試みる。

具体的には、

(1) これまで明らかになっていなかった東京バレエ団の活動実態、および上演作品を、バレエ史研究、舞台美術史研究の両面から調査考察し、現存資料の収集、聞き取り調査から、その実像を浮かび上がらせること

(2) 東京バレエ団の活動とその後「世界有数のバレエ大国」と称されることとなる日本バレエ界の発展との因果関係の考察

(3) 東京バレエ団の結成、解散の原因ともいえる日本バレエ界の特殊性を、今日的視点から捉えなおすこと

である。最終的に、研究成果発表を含めたシンポジウムを開催、およびそれら報告を出版物としても発表する。

本研究により、日本バレエ史上最大のメルクマールとして位置づけられていた「東京バレエ団」について、ようやく学術的考察がなされることとなる。

3. 研究の方法

現在、バレエが日本文化の一部として定着し海外からも高い評価を受ける中、日本のバレエの実像についても一般社会からの興味が寄せられている。しかし、その史実はベールに包まれており、日本バレエ史研究はほぼ未着手の分野であるといっても過言ではない。先行文献としても、日本バレエ協会による『バレエ年鑑』(昭和46年度版-50年度版)に代表されるような上演データをまとめたものや、『日本バレエ史』(新書館、2001年)、『日本のバレリーナ』(文園社、2002年)といったインタビュー集、各舞踊家の伝記類などが発表されているに留まっている。日本バレエ史研究がこれまで着手されなかった要因は、そもそも、家元制度に根付く日本バレエ界が、各団体ごとの閉鎖的な状況にある為、

一つの団体を取り上げての考察という方法にならざるを得なかったことが考えられる。また、白系ロシア人によって民間に根付き、戦前から少ない情報量の中で展開されてきた日本のバレエは、現在にいたる長い道のりの中で、少しずつ修正され正統性を獲得してきた為、過去を掘り起こすことが歓迎されない風潮にあったともいえる。さらに、日本にバレエアーカイヴに類するものが存在せず、歴史資料が散逸していることも挙げられる。研究代表者はこうした中で、日本にバレエを移植したといえる白系ロシア人バレリーナ、エリアナ・パヴロバについて長年調査研究を行い、膨大な資料を収集してきたわけだが、エリアナ・パヴロバ亡き後の戦後のバレエ史を牽引してきたのはまさに、エリアナ・パヴロバの弟子たちであり、エリアナ・パヴロバ研究の過程で得られた、膨大な聞き取り調査や収集資料には、多くの戦後バレエ界の資料、とりわけ、彼らが中心となって活動した「東京バレエ団」についての未発表資料が蓄積されている。

したがって、まずはこれらの資料を土台に、新資料の発掘、関係者の聞き取り調査を中心に、東京バレエ団の実態について調査を行う。そして各上演作品については、当時の世界的バレエ状況と照らし合わせ、その出自の考察を行う。また、佐野勝也氏（博士学位論文「藤田嗣治の舞台美術と劇場空間」）の協力により、当時の舞台美術のCGによる復元も行う。

4. 研究成果

2014年度（初演度）は、資料収集、聞き取り調査を中心に、東京バレエ団の実態について調査を行った。公演プログラム、舞踊雑誌といった当時の資料から、東京バレエ団の結成と離合集散について調査し、また上演された全8作品について、基本データおよび現存する写真資料の収集・検証から、その構成、演出・振付などについて調査考察を行った。

聞き取り調査としては、公演での使用音楽についてを、戦後から日本で上演された多くのバレエ作品の指揮・編曲に携わったバレエ音楽の第一人者・福田一雄氏にインタビューを行った。また、研究分担者・鈴木晶は、上演作品の出自について、上海バレエ・リュス、バレエ・リュス、ソビエト・バレエから調査を進めた。舞台美術については、RA 佐野勝也氏が主に帝劇関連の資料収集を行った。当初は、CGによる舞台美術の復元を予定していたが、佐野氏の急病により資料収集とその考察に変更とした。研究代表者・川島京子は、初演度の成果として、上演作品全8作品のうち、日本初演となる3作品『白鳥の湖』『シェヘラザード』『コッペリア』についての考察を論文として発表した。

2年目となる2015年度は、1年目に行った

基礎的資料の収集と分析から継続し、川島はアメリカ（主にNARA アメリカ国立公文書館、メリーランド大学図書館ゴードン・W・プラング文庫）に渡った資料の調査収集を行うとともに、東京バレエ団がその後の日本バレエ界に及ぼした影響について考察。1950年代の日本におけるバレエ・ブーム現象について調査研究し、メディアに現れるバレエの表象と、一般社会へのバレエ認知のされ方、およびバレエ界内部の実情とを照らし合わせ、「世界有数のバレエ大国」へと発展を支える戦後のバレエ・ブームを立証することを試みた。また、鈴木は前年度から継続して、東京バレエ団上演作品の出自についての調査を継続。特に、第一回公演『白鳥の湖』において振付者が明言している「ゴルスキー版」についてを、ロシアバレエ史を専門とする村山久美子氏の協力で調査した。また、それら作品の上海、日本への受容のされ方とその後の上演形態の変遷について調査する為、バレエ史研究の第一人者である薄井憲二氏（日本バレエ協会名誉会長）に聞き取り調査を行った。なお、舞台美術の考察については、担当 RA であった佐野勝也氏の急逝により、中止とならざるを得なくなった。

最終年度となる2016年度は、東京バレエ団結成70周年にあたることもあり、第一回公演『白鳥の湖』が初演された8月に、本研究の成果発表とともに、当時を知る関係者を招聘してのシンポジウムを開催した。開催会場は、この第一回公演『白鳥の湖』の稽古場となっていた貝谷バレエ団で行われた。内容は、川島京子によるこれまでの調査研究をもととした成果発表と、7名の登壇者による討議。加えて、東京バレエ団による『シャヘラザード』（1948年）の映像を川島の考察とともに視聴した。討議は、日本バレエ史に詳しい舞踊批評家・山野博大氏にお願いし、東京バレエ団上演作品の音楽に詳しい、指揮者の福田一雄氏に音楽関係の証言をお願いした。そして、東京バレエ団に参加した各団体、各舞踊界の門下にあたる諸氏にご登壇頂いた。松尾明美バレエ団としてうらわまこと氏、服部・島田バレエ団として森龍朗氏、貝谷バレエ団として大竹みか氏、小牧バレエ団として雑賀淑子氏、また、バレエ団組織を持たずフリーとして参加した藤田繁の御長男である舞踊家・藤田彰彦氏である。

これらに加え、このシンポジウムとは別途に、東京バレエ団第二回公演以降のすべての公演に参加し、主役を務めている関直人氏に聞き取り調査を行った。聞き取り調査には、うらわまこと氏にご協力いただき対談の形式とした。

以上のシンポジウム、聞き取り調査により、新たな資料の発掘はもとより、上演経緯、分裂の原因、各作品の実像、振付の詳細、作品の出自などの重要証言が得られると同時に、不明点・疑問点の整理が行われた。

以上の内容は、3年間の本研究における成果に加え、東京バレエ団の歴史的意義、そして現在に至る日本バレエ界の特殊性と結び付け、本年度中に報告書として出版する予定で準備を進めている。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 11件)

1) 鈴木晶 『『オペラ座の怪人』とパリ・オペラ座』『オペラ座の怪人公演プログラム』、劇団四季、2017年、査読無

2) 川島京子 「1957年、ボリショイ・バレエ初来日の思い出～薄井憲二さんに聞く」、p36-39、『ボリショイ・バレエ2017年日本公演プログラム』、朝日新聞、ジャパニアーツ、2017年6月、査読無

3) 川島京子 「牧阿佐美バレエ団『眠りの森の美女』」、p14, 15、『NHKバレエの饗宴2017公演プログラム』、NHK、2017年4月8日、査読無

4) 川島京子 「日露バレエ交流100年—1916年帝劇で上演された日本初のバレエ公演」『国際演劇年鑑2017 世界の舞台芸術を知る』、査読無、2017年3月、pp. 186-193

5) Kawashima Kyoko 「100Years of Russo-Japanese Cultural Exchange in Ballet: The First Ballet Performance at the Imperial Theatre in Japan」『Theatre Yearbook 2017 Theatre in Japan』、査読無、2017Mar、pp. 134-141

6) 川島京子 「映画『ポルティチの唾娘』(1916)における脚色—舞踊史研究の観点から—」『早稲田大学大学院文学研究科紀要』、査読無、第3分冊第61輯、2016年3月、pp. 5-18

7) 鈴木晶 「フイエ『舞踊記譜法』(1700)をめぐって」『Who Dance? 振付のアクチュアリテイ』、早稲田大学坪内博士記念演劇博物館、pp. 230-241、2015年12月、査読無

8) 鈴木晶 「日本のバレエとスターダンサーズ・バレエ団」『スターダンサーズ・バレエ団50年史』スターダンサーズ・バレエ団、2016年、査読無

9) 鈴木晶 「バレエとフェスティバル」『日本照明家協会誌』、pp. 39-40、2015年12月、査読無

10) 鈴木晶 「マリインスキー・バレエの過去・現在・未来」『マリインスキー・バレエ来日公演プログラム』、pp. 42-48、2015年11月、査読無

11) 川島京子 「日本バレエ第二の誕生『東京バレエ団』の歴史的意義とその作品—『白鳥の湖』『シェヘラザード』『 Coppélia 』」『演劇映像』、査読有、第56号、2015年3月、pp. 111-134

〔学会発表〕(計 5件)

1) 川島京子 「初来日が日本に与えた衝撃」、朝日新聞社主催「初来日60周年記念ボリショイ・バレエ講演会」、2017年4月15日、朝日新聞東京本社読者ホール(東京都中央区)

2) 川島京子 「東京バレエ団とは」、「東京バレエ団をふりかえる」シンポジウム(H26-28科学研究費助成事業基盤研究C「日本バレエの誕生『東京バレエ団』とその歴史的意義」(研究代表者:川島京子)主催)、貝谷バレエ団(東京都世田谷区)、2016年8月15日

3) 川島京子 「日本バレエの幕開け—白系ロシア人エリアナ・パヴロバの功績」、東京外国語大学言語文化学部主催『春の芸術祭』、2015年12月18日、東京外国語大学府中キャンパス(東京都府中市)

4) 鈴木晶・海野敏 「パリ・オペラ座バレエのレパトリー、とくに上演頻度上位の作品の経年変化—全上演記録の分析をもとに」、舞踊学会第20回定例研究会、2015年6月7日、日本大学芸術学部(東京都練馬区)

〔図書〕(計 1件)

1) 川島京子編『牧阿佐美バレエ団60年史』、(公財)橘秋子記念財団、2016年8月、全519頁

〔その他〕

1) 川島京子 「100年の時を超えて現代によみがえる牧神、牧阿佐美バレエ団『牧神の午後』と『ジゼル』、『ダンス・キューブ』、株式会社チャコット、2015年11月

2) 川島京子 『吉田都×堀内元 Ballet for the Future』公演記念 堀内元特別講習会レポート、『ダンス・キューブ』、株式会社チャコット、2015年8月

6. 研究組織

(1) 研究代表者

川島京子 (KAWASHIMA, Kyoko)

早稲田大学・文学学術院・招聘研究員

研究者番号: 10409732

(2) 研究分担者

鈴木晶 (SUZUKI, Sho)

法政大学・国際文化学部・教授
研究者番号： 50196804